



交遊と不朽の古文辞学 服部南郭研究序説

著者	吉川 裕
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第467号
URL	http://hdl.handle.net/10097/60753

交遊と不朽の古文辞学——服部南郭研究序説——要旨

東北大学大学院文学研究科文化科学専攻日本思想史専攻分野

A9LD1004 吉川裕

本論文は荻生徂徠の提唱した徂徠学の文学的側面を継承し、近世中期の文人として泰平を生きた服部南郭の思想を、交遊と不朽の観点から再構成することを通して、凡そ四十年ぶりに服部南郭像を更新していくことを目的とするものである。服部南郭の研究史は日本近世思想史の研究者によるものと、近世文学史（国文学史・漢文学史）の研究者によるものの二つに分けることができる。日本近世思想史、そして近世文学史の中で語られた南郭を端的に述べるならば、①徂徠学の挫折・崩壊を代表する人物であり、②「自我」の表現を推し進めた点は評価できるが、「近代」的になりきれなかった過渡期の人物であるというところだろう。本論文はこのような服部南郭像を乗り越え、新しい南郭像の提出を課題とした。

第一章「泰平を言祝ぐ徂徠学—服部南郭の現状理解と自己認識—」では南郭の太平理解を考察した。南郭像を更新していくにあたり、まずは南郭の現状認識そして自己認識を捉えておくことが必要不可欠であろう。検討の結果、南郭は「封建」「無為」「天授」といった言葉を徂徠学者としての理解で用いながら、当代を言祝ぎ、現状を肯定的に捉えていた。その一方で、南郭は自身が社会の無用者であるという意識を同時に持ち合わせており、その中で「吾が好む所に従ふ」という姿勢で生きようとしていたことを指摘した。

第二章「交遊と不朽—服部南郭の古文辞学について—」は、南郭の古文辞学を再考し、従来定説となっていた「虚構」への逃避方法としての古文辞学の役割を、さらに突き詰めて考察し、その新しい一面を浮かび上がらせようとしたものである。南郭の漢詩文の中でもこれまであまり注目されてこなかった作品を精査することで、南郭の古文辞学は、徂徠の古文辞学が学ぶ者に求めた境地を忠実に継承し、その境地を通じて豊かな交遊と不朽の可能性を、古文辞学による詩文によって求めていたことを明らかにした。

第三章「服部南郭「雑詩三首」考—憂悲と交遊について—」では連作「雑詩三首」を精緻に読み進めることで、南郭の持つ死生観を明らかにした。これは第二章で明らかにしたような、交遊と不朽に重点を置いた性格の古文辞学を求めた、南郭の心理的背景の一端を知るためである。この連作からは①徂徠学を修めた南郭であるが、儒学者として「天」や「理」、「先王の道」に安んじて老いや死の「憂悲」をぬぐい去ることができなかったこと、②その代わりに親しい友人たちとの交流によってつかの間ではあるかもしれないが、心の平安を保とうとしていたこと、③そのため友人との別れが辛いものであったことなどを読み取ることができた。志を同じくする文人たちとの交遊は南郭にとって切実な意味を持つものとして必要とされていたことが、南郭独特の古文辞学理解に繋がったものと考えられる。

第三章補論「服部南郭の交遊とその意義について―「文人の交遊」再考―」では「文人の交遊」のより実践的な意義について考察した。前章までに南郭に老いや死への「憂悲」があり、その解消のために友人たちとの交遊が南郭にとって切実に必要とされたことを指摘した。しかし上記のような側面ばかりではない。「文人の交遊」を楽しむことに、教育や学習の面においても実用的な役割を見出すことができた。そもそも護園学派は「楽しみ」という感情に根ざした活動を心がけており、「文人の交遊」は南郭にとって老いや死への「憂悲」からの救済と、楽しみながら教育・学習を助ける実践性を持つ、両義的な存在であったことを指摘した。

第四章「護園学派の三不朽―朽ちる身体と朽ちざる言葉―」では護園学派の荻生徂徠・太宰春台・服部南郭の三名の三不朽と、朱子学者からは木下順庵、仁斎学からは伊藤東涯の三不朽とを比較検討することで、護園学派の独自性、その中でも南郭の独自性について考察を加えた。これに加え、南郭たち護園学派の学者たちが「死する者は復た起きず、古人の骨は已に朽つ」という文句を常に意識していたことを指摘することで、第二章で明らかにした交遊と不朽の古文辞学が、南郭に限らず広く護園学派に必要とされた動機を解明した。

第五章「伊東藍田の思想と同時代的位置づけ」では南郭の古文辞学の行方を知るため、護園学派の末裔として当時知られた伊東藍田の思想を中心に考察した。藍田は徂徠・南郭を信奉し、忠実な徂徠学者を自認していたが、やはりいくつかの見逃せない逸脱点を抱えた学者であった。また他の徂徠学者と違って同時期に盛んになった反徂徠学への応答をほとんどせず、忠実な徂徠学者でありながら、弁護をしないという一見すると矛盾する姿勢が存在することを確認しながら、同時代的の中で位置づけることを試みた。

第六章「伊東藍田の三不朽―南郭古文辞学の行方―」では藍田の三不朽と立言不朽について考察を深めた。前章の矛盾は藍田の身後を期す、つまり不朽を求める態度と関わっていた。そして藍田は徂徠や南郭たち徂徠学特有の立言不朽・三不朽という形式を受け継ぎながらも、儒者として「仁」「善の称」としての「名」を意味する立言不朽に苦心した末流の人物であったことを明らかにした。そこには南郭とは違った現状認識があり、それが三不朽観にも重要な差異を生じさせたと結論づけた。

経世済民の学の方法論として徂徠が提唱した古文辞学は、泰平を生きる南郭によって交遊と不朽の古文辞学へと変形して受け継がれた。しかしその南郭の古文辞学も、儒者として「仁」を求める藍田によってさらに変形して受け継がれていったのだった。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	吉川 裕
論文審査担当者	(主査) 教授 佐藤 弘夫 教授 高橋 章則 准教授 片岡 龍
論 文 名	交遊と不朽の古文辞学 ―服部南郭研究序説―
<p>本論文は、18 世紀日本の漢文学の文学圏をフィールドとして、そこに棲息する学者らの同時代認識、個人の生の不可逆性に対する自覚、それに抗し得るといふ言語活動の理論、そこに開かれる知的共同体への期待やその特性などを、難解な漢詩文集群や関連史料を丹念に読み解きながら、明らかにしようとしたものである。いまだ十分な研究の及んでいない近世中後期の膨大な漢詩文を、思想史・文学史・社会史・交通史・メディア史などから、越境的にアプローチしていくための「研究序説」を目指したものである。</p> <p>本論文は、序論、第 1～6 章（第 3 章は補論を付す）、結論と今後の課題から構成されている。序論では、本論の中心となる服部南郭に関わる研究史と、本論文の課題と方法が述べられるとともに、各章の目的が示される。</p> <p>第 1 章から第 3 章補論までは、服部南郭について論じられる。古文辞学の提唱者である荻生徂徠の学問は、通説では、政治学的方向と文学的方向の二派に分かれ、南郭は後者を代表し、その文学営為は非社会性を特色とするとされるが、ここでは南郭の当代「太平」認識を緻密に分析することによって、それがたんなる脱政治や非社会性ではないことが指摘される。南郭にとって古文辞学は、個人の生の不可逆性に抗し得る理論として受容され、その実践によって、時空を超えた知的共同体への参与と現出を試みたものであった。</p> <p>第 4 章では、このような南郭の古文辞学理解の特質を、「三不朽」という概念を中心に、徂徠学派内部（荻生徂徠、太宰春台）での異同や他学派（木下順庵、伊藤東涯）との比較を通して多角的に検討することで、それが身体の無常観と密接に結びついていることが論じられる。</p> <p>第 5、6 章では、反徂徠学の風潮の強まる時代状況の中で、それに再反論する他の徂徠学者とは異なる態度をとった伊東藍田の古文辞学理解が、南郭を受け継ぎながら、より現世改革的な志向を強めたものであることが論じられる。</p> <p>結論と今後の課題では、本論の内容を概観した上で、南郭晩年の心象世界の叙述、南郭の「家」継承意識の分析等が欠如していることによる問題点と今後の展望が述べられる。</p> <p>本論文は、思想史的位置づけのスケールや、分析概念の共有性などの点に、若干の課題は残すものの、難解な史料の堅実な読解、均衡のとれた解析、柔軟な立論などの点で特出し、総合的に見て、通説を覆す新たな知見を提示し得ている。本論文の成果が、斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑問の余地がない。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	